

返済は爆乳パイズリ！

爆乳熟女が巨根童貞から
借りた金を強引に体で返す話



うさぎロボ 著

1章 玉を掴む女

——オッパイデケエな……

パチンコ屋で客に小銭を貸し、高利を取る。

そんなセコイ闇金を近峰がはじめたのは、特に理由はなかった。

何の特技もなく、人と親しくするのも苦手。

高校を出て、フリーターをやっていた。

暇つぶしにパチンコをしているとき、金に困っている主婦らしい女性に気づいた。

そこでひらめいた。

主婦なら、家に帰れば金もあるだろう。

腕力で負けるとも思えない、ごねられる気もしない。

これにちょっと小銭を課して、勝てば回収、負けても次に来るときに返してもらえばいい。

何処かでそういうセコイ金融の話を知っていたのかもしれない。

とにかく、その思い付きが近峰金融の始まりだった。

と言っても、まだ一年目だ。

が、バイトをせずとも食っていける状態にはなっていた。

客は大体が主婦だが、話を聞いて男も客になり始めていた。

ごねたりしないかと、気の弱い近峰は少し不安だった。

だが、相手からすれば近峰は闇金である。

見た目が多少弱そうだろうが小銭のためにごねるリスクは犯さない。

もう少し派手に稼ごうとすればヤクザでも寄ってくるかもしれないが、今の所それほどの金額は動いていない。

というか、動かさない。

元々金があるでもないのだ。

というわけで、地味にやっている。

根城のパチンコ屋は、始めたときから同じ、映画館のような大きな所で、客は常に大勢いる。

その中で、あまり派手なことをしていない普通の主婦を狙い、金が切れた感じの所を見計らって声をかけ、客を開拓する。

客に噂を聞いたり、紹介されてくる客もいる。

今目の前にいるのは、噂を聞いたという主婦。

長い黒髪。白いシャツの下にスイカのような乳房を詰め込んだ女。

三十ぐらいだろうが、立ち振る舞いがなんとなく熟女というイメージをかもし出す。

結婚生活が長いせいなのだろうか——近峰は彼女の人生など一切知らないが、そんな感じがした——若い女に感じるプレッシャーのようなものを感じない。

「闇金って言うから怖いのかなと思ったけど……みんなが言ってる通り、ちょっと可愛い子じゃな

い」

金利を説明し、金を渡すと微笑む熟女。

かわいい、などといわれて内心ドキリとする。

——おばちゃんなんぞに……

思うが、熟女ではあってもその中では相当若い部類ではある。

名前と携帯番号を押さえ、それだけで金を貸す簡単なシステム。

爆乳熟女の名は、富士垣というようだった。

——マジで、オッパイデケエ……

近峰は童貞である。

プラプラしているうちに、今二十三。

まあ、このぐらいの年の童貞も珍しくはないだろう。

しかし、十三でもうやっている奴もいるだろうと思うと、劣等感に苛まれる。

二十までにはと漠然と思っていたが、それを過ぎて三年。

——まさか、一生このままでもないだろうけど。

そう思うと恐ろしくなる。

世の中の女に、何か人間ではなく、ロボットか何かのように見なされているような気さえしてくる。

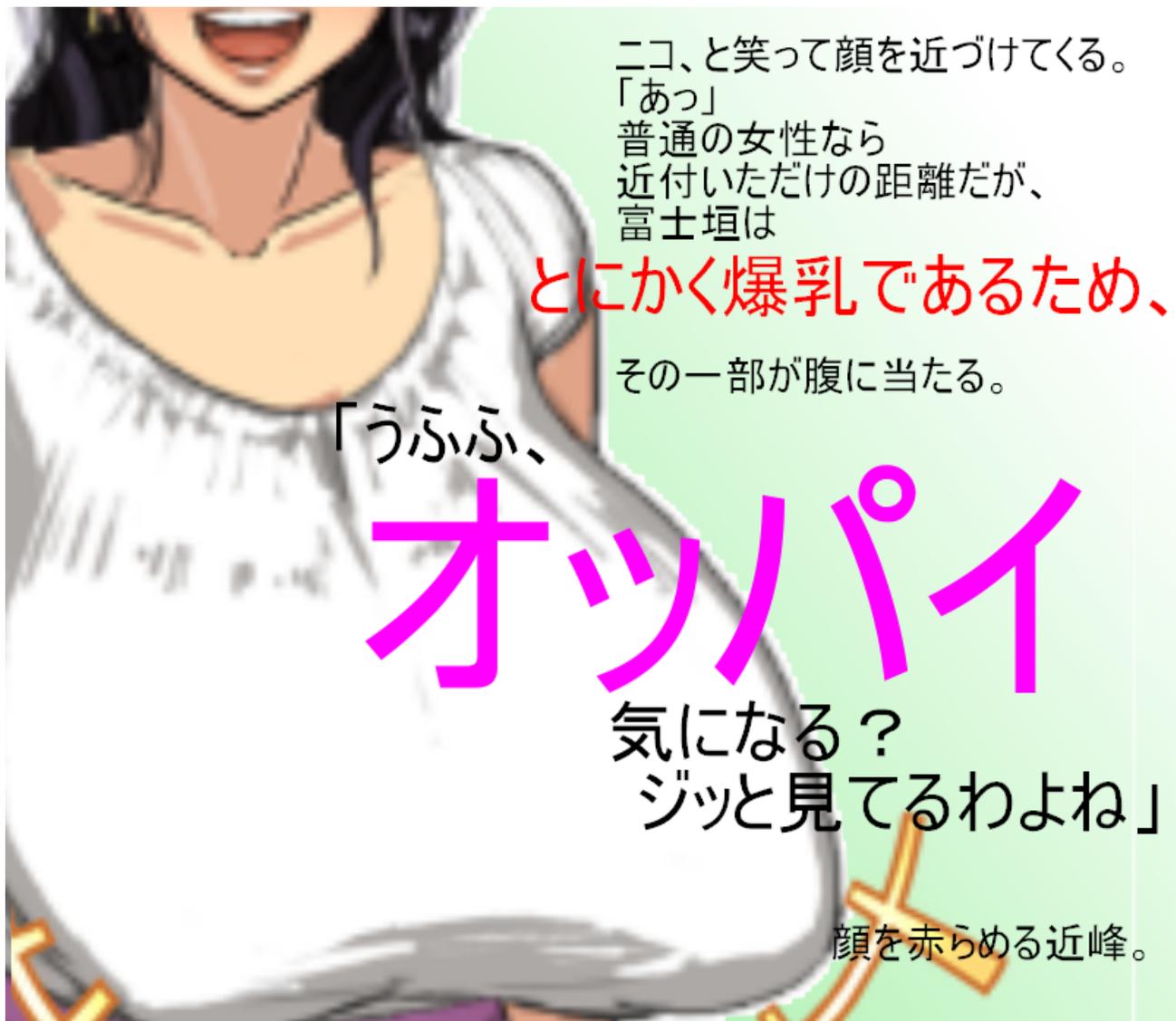
——ああ、一度でいい、やってみたい。

気が弱っているときは、そこまで思ってしまう。

と、富士垣がじっと見てきていた。

「足りませんか？」

「ううん、そうじゃなくて……」



ニコ、と笑って顔を近づけてくる。

「あっ」

普通の女性なら近付いただけの距離だが、富士垣はとにかく爆乳であるため、その一部が腹に当たる。

「うふふ、オッパイ気になる？ ジッと見てるわよね」

顔を赤らめる近峰。

闇金に借金する。

金額が少ないので、払う利子はそれほど多くない。

だが、率としたら相当酷いものだ。

富士垣も、できればそんな事はしたくない。

しかし、パチンコの台はある程度金を吸い込めば返すような仕組みになっている。

あと少し入れれば戻るというところで、軍資金が尽きて諦めるのは損なのだ。

尽きないように余分に金を持ってくるようにしていたが、最近後一步でそれも尽きることが続いた。もう、我慢するのも面倒なので借りる事にした。

別に利子が高い以外、何か面倒なことを仕掛けてくるわけでもないのだ。

闇金は、富士垣より五歳以上若い男。

おなじパチンコ仲間の主婦たちの間で、数年前から話題に上っている。

相当若い頃から闇金をしているわけだ。

パツとしない、もてそうに無い感じの男だが闇金などやっているだけのことはある、と評判だった。

パチンコ主婦仲間の中では若い方が、何か特別扱いを受けようと思ったか言い寄った事があった。しかし、まったく相手にされなかった。

パチンコ屋の店員などでも、ちょっと良さそうならすぐに言い寄る評判の悪い子だった。

それを袖にしたことで、彼の評判は高まった。

ストイックだ、と見なされている。

だが、そうなのか。

今日目の前に立ったとき、富士垣は疑問に思った。

目付きだ。

親戚の童貞少年、まだ高校にも行っていない子と似たようなつかず離れずの熱い視線を自分の巨大すぎる乳房に向けてきたのだ。

そこで、ピンときた。

——ヤリマンに誘われても乗らなかったのは、気づかなかったか、乗りたくても上手く乗れなかったかどっちかなんじやない？

絶対そうとは言い切れない。

そこで、カマをかけた。

さりげなく近付き、スイカップを押し付けた。

反応は、慌て、どうしていいかわからないと混乱した様子だった。

富士垣は事故のような調子を装ったが、三十年爆乳と付き合いしてきた女が事故でそれを押し付けるわけが無い。

そのぐらいわかるはずだ。事故に見せても、わざとなのだ。

大人の男なら、わざと女に乳房を押し当てられれば、それなりの反応を見せるだろう。

これはやれるかも、と期待の目を一瞬は浮かべるはずだ。

だが、闇金の若者は何もなかった。

何がおきているかよく分からないが、ラッキーな事件に少し嬉しい、そんな子供っぽい反応を見せただけだ。二〇歳を越えた男が。

「童貞ねえ……アレは絶対」

だからどう、ということはない。

童貞をかわいがり、いろいろ教えてやりたいという衝動は男に慣れた熟女として、人並みにある。

しかし無理矢理股間を握りに行って「やらないか」と押し掛かっていくほどではない。

夫もいるし、子供もいる。

夫とは周りの主婦の例よりは頻繁に夜の生活もあり、結構満たされている。

「かわいいわね」

そう思って、愛でる程度で済ませる。

つもりだった。

最後の金を機械に入れる。

ジャラ、と出てきた玉を掴む。

冷たい銀玉、祈りを込めるために、玉を握る。

「お願い、一杯出して……」

しょうもない、げん担ぎ。

もうそのぐらいしかやれることが無い。

数分後……

玉が切れる。

金も切れた。

「女に握られたのに何も出さない玉なんて糞以下よ……」

後一步、もう少し金を入れれば台は出すほうに回るはずだ。

富士垣の前に座っていた男は、かなり突っ込んだ様子で立つとき台を叩いて怒っていった。

前の人が積み上げた所に座れてラッキーと富士垣は思った。

すぐ出ると期待したが、不思議と出ない。

実は、前に座った男は元々短気で、大して入れていないのにすぐに怒って帰っていっただけなのだ。

だからこれからさらに突っ込んでもまだ玉を出す状態に切り替わりはしないが、そんなこと富士垣に分かる話ではない。

「仕方ないわ……あと少しだもんね」

自分に言い聞かせ、電話をかける。

近峰金融。

何人でやっているのか知らないが、それほど大規模とも思えないのに大げさだと富士垣は思っていた。

実際、近峰一人なのでまったく大げさとしか言いようが無い。

とはいえ、一様食っていけるので個人営業の金融屋ではあるのだ。

このパチンコ屋が根城なので、すぐやってくる。

数万借りて、さらに突っ込む。

それも、やがて切れる。

「何よこれ……」

舌打ちしたくなる。

予定がまったく狂った。

今月は、実は苦しいのだ。だから余分に金を持ってくるより、闇金で回そうと思った。

勝ちさえすれば、問題なかったのだ。

だが計算が狂ってしまった。

中小企業の経理をしているまじめな夫。

パチンコでスツて闇金に金をかり、それもすっちやった。

といえ、どういう反応をするか、十年近く一緒にいるが読めない。

——っあ、ヤバイわ。まさか離婚はありえないとしても、絶対怒られる。

面倒だ。

何とかならないか。

なるわけが無い。

と、ふと一つ思いつく。

電話で、再び近峰を呼び出す。

ただ、今度は外の駐車場にだ。

「え？ 金を返せない？」

「待って欲しいの」

「もちろん待ちますよ、次に来た時の利子は始めに言ったとおり……」

折り言った話、ということで富士垣のワンボックスカーに乗っている。

運転席に富士垣、助手席に**童貞闇金**。

一週間以内なら、利子は一割。

その日のうちに返しても同じだ。

一日一割。

十日で一割という金融屋の大ヒット漫画があるが、その十倍とはよほど警察が怖くないようだ。

まあ、七日なら十日で一割とさほど変わらない……ことも無いか。仮に変わらなくても暴利ではある。

夫の給料日を考えれば、返せるのは二週間もあとだ。

となると、利子は二割。

「六万貸しましたね。今日から一週間なら六千円です」

「返せるのは、二週間後になりそうなのよ」

「それなら、一万二千円ですね」

——高いわ、もう。信じられない。一万二千円あったら何が買えるの？ チョコレート千二百個じゃない！

払いたくない。

とてもではないが。

六千円でも高いのだ。

それでも、今日買ってあぶく銭を稼げば、その中から返すのは苦痛では無かったのだが。

「利子は、別の形で払わせてもらえないかしら？」

「現物ですか……なんでしょう？」

かなり嫌そうな顔の近峰。

それに、体を近づける。

手。

ムニユ、と柔らかい物を掌の中に納める。

「はうっ！　ちょ……」

「現物は、これよ」

舌を突き出し、ちろちろと動かしてみせる。

富士垣は三十歳。

近峰の年で、モテる男なら……いや、もてずとも普通に恋人がいた男ならどう反応するか。

ババア無理すんな、とでもいうか。

いや、口には出さないが、反応としてはそれだろう。

だが、近峰は体を強張らせ、顔を真っ赤にする。息が富士垣に当たるのを気にしているのか、細く絞っていた。

——うわ……かわいいわ。

どきりとさせられる。

童貞だ。

この反応からして、確実に童貞。

——ヤバイわ、心臓が……ドキドキしてる、旦那とこんなことになったことってあったっけ？

職場結婚。

近くにいる、独身で年齢的に会った相手と引っ付いた。

恋愛結婚といえばそうだが、こんな選択肢が無い「恋愛」ってどうよ、と思わないでもなかった。

一番ドキドキしたのは当然のように初セックスのとき、というまあ動物的な関係。

それでも、間違いなく幸せではあったのだ。

しかし、それは物足りないものだったのかも、と今胸の高鳴りと共に思う。

チラ、と近峰を見る。

目をそらす。

——おお、もう……そんな処女みたいな。っていうか私も、こんなおチンチ〇をオシッコにしか使ったことが無い子に、ドキドキしてるなんて……

そこが逆にいい気もする。

「そ、その、どういうことでしょう……」

「ふふふ、こういうことよ……」

手を伸ばし、椅子を倒す。

「あっ」

寝たままの近峰。

ズボンの前に手をやる。

「ん、あらっ」

前のツッパリに微笑む。

「あらあら、大変、ズボンの前に、何か入ってるわ」

下から、何かが突き上げてきている。

夫や、子供は男の子二人なのでもう死ぬほど「何か」を見てきているが、まるでそれを知らないかのような声を挙げる。

「どうしたのかしら……ねえ？　ここ、どうしちゃったの？」

いわれて、近峰の息が荒くなるのを感じる。

腰をごそそと動かす。

パンツの中で垂れているものが臨戦態勢になると、位置を直さねば辛いのだ。

正確には、直さないと臨戦態勢になれない。

硬くなろうとしている状態で足踏みする事になる。

熟女として、それは大体わかっているので富士垣はベルトを外し、パンツを引っ張る。

と、突き出す。

「きゃあっ！」



思わず声を挙げる。

パンツを引っ張って空間を作ってやれば、その中でテントを張ると思っていた。

だが、予想に反して近峰のパンツの中身は、引っ張って隙間を作られると上に飛び出してきた。

「ま、まあ！ えええ？ バトンじゃない、リレーの！ ほら、運動会とかで使ったことあるでしょ？ うわあ、なにこれ.....ああ、熱い.....ビクビクしてるわ。近峰さん.....あなた信じられないぐらい、おチンチ○大きいのね！」

「そ、そんな、普通ですよ」

「これが普通って！ このデッカイおチ○ポが普通って！ ……全男性ディスってんの！？ っていうか、九割ね、全世界の男性の九割は、これが普通って言われたらあなたを殺そうとするわよ！」

ズボンを下ろす。

ブルン、と巨球が揺れる。

ため息が出る富士垣。

「キャンタ○まで大きいなんて……」

指でゆっくり右玉をつく。

「あっ、そこは……はうっ！」

握る。

グニグニと、男の急所を手の中で転がす。

しっつ、顔を見る。

強張らせつつ、不安げな顔で見てくるだけだ。

夫は玉を握らせてくれないタイプ。

何度か付き合った男たちのうち、Mっ気がありそうな者たちは皆握らせてくれた。

——この子、見たまんまMっぽいもんね。うふふ、グニグニグニグニ、男の命、手の中に握るのはいい気分ね。

やろうと思えば、男として終わらせられる。そう思うと仮に多少酷い態度をとられようと、「次に握ったときやっちゃうぞ」と思うだけで許せたりするのだ、富士垣は。

玉が潰れても、ナノテクで一日で治せる時代なのでなおさら軽くそう思える。

「そういえば、この前遊牧民のドキュメンタリー見たのよ」

「へえ」

「羊の雄がちょっと大きくなったら……」

肉袋の根元を指でスッと横に線を引く。

「袋の根元を切るの」

「え？」

「そうしたら、ぽろっとタマタマ落ちてくるから、握ってちょっと下に引っ張れば……」

ギュンギュンと、音を立てるように肉玉が引きあがり、縮む。

しかし、富士垣が見込んだとおり、一物のほうはギンギンだった。

——大きいわねえ。二十センチ以上あるわよこれ。それが、家畜の去勢話でピンピンなんて……面白すぎるわ。

「うふふ、どうしちゃったの？ おキ○タマがカチカチよ。そして、上もカチカチ」

どう答えていいかわからない、という風に目を泳がせる近峰。

「それじゃ、そろそろ始めるわ。ずっとこうしてても仕方ないもんね」

「で、でも……」

唾を飲む近峰。

「もう、根っからの童貞ねえ」

歯を見せる。

ビク、と体を強張らせる近峰。

急に、熟女に下半身を剥き出された。

彼女のワンボックスカーは、別にスモークシールドの加工などはされていない。

外から見れば丸見えだ。

駐車場の端で、目立たない場所にあるとはいえ、横を誰か通れば中は見える。

——こんなところで、こんな……チ○ポが……

ビクンビクンと、怖いぐらい脈打っていた。

大きい。

立って、二十二センチ。

と、思っていたがそれは正確ではなかった。

物差しを軽く当てて測っていたが、本当は恥骨に強く当てねばならないという。

その正確な測り方をすれば、二十四センチだった。

平均は十二か、十四か……そんな話を一切気にする必要が無い巨根。

ただし、童貞。

一度も、まともに女に見せたことが無い大物。

それが、男に慣れているだろう熟女の目に晒される。

大きい、大きいとしきりに褒める。

本当のことなのだ、素直に受け取れる。

本当に巨大でなければ、考えただろう。

彼女、富士垣は利子を下げる交渉として、女の武器を使ってきている。

そんな無茶な話も無い。

ズボンを下げられる。

一物は、パンツの穴ではなく腰のゴムの下から突き出しているのもそういうことも出来た。

ついに、玉まで出されて完全に下半身裸だ。

そうして、急所を指で突いてきた。

ゾクゾク、と背骨に何か妙な感覚が走る。

それほど親しくも無い女に、絶対急所を突かれる。

ついで、握られた。

——もし握り潰されたら……キ○タマ握り潰されたら……去勢……

玉は、ナノテクで簡単に治るという。

それでも、潰れたときの痛みも屈辱も変わらない。

だが、治ると思うと、無理に女の手を払おうとは思えなかった。

それに、まず間違いなく、というか絶対に、潰しに掛かるわけが無いのだ。

それでも、相手はその気になれば女にされるというのは重い。

しかも相手は女だ。

女の手で去勢、というのを想像すると腹の底が小刻みに震えるような妙な感覚を覚える。

と、玉を握ったまま、その上の、袋の根元に指で線を引く熟女。

なんだろうかと思うと、急に話し始めた。

遊牧民がやるという、羊の去勢を。

縮み上がった。

一瞬で、今まで自分のより大きいのを見たことが無い、サイズに自信がある肉玉が縮んだ。

しかし、一物は鋼のように、さらに硬くなった。

——俺、変態か？

唾を飲む。

もし、熟女も、責める側の変態なら……

だが、熟女はすぐに肉玉への責めはやめる。

そして、いって来る。

「根っからの童貞ね」

玉がさらに縮む。

去勢話より、さらに衝撃が大きかった。

「ど、童貞じゃないですよ」

「そう？ うふふ、その割にはマグロじゃない？ おチンチ〇だけ馬だけど」

また巨根褒め。

しつこいと思うのに、喜んでしまう。ビク、と一物が動くと、巨大なだけに僅かな動きでも大きく反映される。

チラ、と熟女がそちらを見て、頬を緩めるが何もいわない。

「それじゃ経験豊富な近峰さんに聞くけど……」

言葉を切り、唇をベローリと長い舌で舐める。

思わず息を呑む。

もしその舌で、一物を舐められたら。

茎を舐め上げられ、先っぽをアメのようにならされたら。

ビクビク、と一物が震えてしまう。

その反応に何処か満足げに小さく頷きつつ、はっきり発音する爆乳熟女。

「フェ・ラ・チ・オ……って、いくらぐらいかしらね？」

「い、いくらとは」

「利子是一万二千元でしょ、おフェラでチャラには？」

「それは無茶で……あっ」

ベローリ。

根元から舐めあがる。

「あいいっ」

温かさ、柔らかさ、湿った感触。

異次元。

フェラの想像などいくらでもしてきたが、本物の女の舌は想像しうるものではなかった。

物体としての感触だけでも相当なものなのに、意思を持って動くのだ。

それも、動かす意思は男に慣れた熟女のもの。

「六千円、一回分の利子だけでいいわ。ねえ……溜まるの早いでしょ、こんなに大きいんだもん、こう・が・ん・が。キンキーン。大きいわあ」

もうどうしてもよくなってくる。

熟女の息も熱く、荒くなってきている。興奮しているのではないか。

ただ、金のために誘っているわけではない。

本人も楽しいのか。

そう思うと、最後の理性も消えてしまう。

「それじゃ、フェラで六千円……ああっ！」

根元を握る女。

**根元を握る女。
髪を撫でつけ、膝や腹、腕の位置を調整する。**



「うふふ、こんなデッカイチンチ〇にフェラする日が来るとはね。嬉しいわ。しかも利子も無くなるなら、いうこと無しよ。特大ペ〇ス、いただきまーす！」
ヌポ、と女性器に入れたのかと思うような音を立てて啜える熟女。口をすぼめるように、舌で口の上に一物を押しつけ、全体を濡らし、慣らしていく。

髪を撫でつけ、膝や腹、腕の位置を調整する。

「うふふ、こんなデッカイチンチ〇にフェラする日が来るとはね。嬉しいわ。しかも利子も無くなるなら、いうこと無しよ。特大ペ〇ス、いただきまーす！」

ヌポ、と女性器に入れたのかと思うような音を立てて啜える熟女。

すぐに舌を動かしたりしない。

口をすぼめるように、舌で口の上に一物を押しつけ、全体を濡らし、慣らしていく。

「あ、あ、温かくて……あっ」

しばらくして、動き出す。

ゆっくり、舌が回転する。

「ああっ、すご……おっ、いいっ」

でる、早くも出てしまう。

六千円が一瞬で消える。

我慢しなければ。

そう必死で思う、が思えば思うほど、神経が一物にだけ集中してしまう。

「あおおっ！」

情けない声を上げ、射精。

仰け反り、シートにしがみつくようにして体を強張らせる。

突然の射精に、目を見張る富士垣。

——おおっ！ いきなり……童貞にしても早いわ……んぐっ、出る、でまくる。若いわ……凄い量……

気管に入らないように何とか舌でガードして、口の中に出すだけ出させる。

「ひぐっ、おぐっ」

ほとんど白目を剥き、ビクンビクンと痙攣する近峰。

それを上目遣いで見て、満足の笑みを浮かべる富士垣。

——うーん、こんなおぼちゃんの口でここまで若い子が楽しんでくれるなんて。いいわねやっぱり童貞は。奇貨おくべしね。

今は値段が安い、いずれ値上がりする本当は価値あるもの、というような意味と富士垣は考えていた。

——本来そこそこ値打ちのある男でも、童貞だと積極的に動けず、本来の立ち位置に立てない。だから本来なら相手にしない年上の女でも、いわば割安で手が出せるってわけね。

考えている間に、近峰がガックリする。

出すだけ出し終わった。

だが、一物は巨大なままで富士垣の口の中で我が物顔だ。

チュポン。

そんな音がするのか、と驚くような音を立てて口を巨柱から離す熟女。

「うふふ、気持ちよかった？」

モミモミ、と玉揉み好きだろう童貞の肉玉を揉んでやる富士垣。

男が気持ち良さそうに体を強張らせると目を細める。

——いいわねえ……。

「そ、その、気持ちよかったです」

「私も楽しかったわ。うふふ、たっぷり飲ませてくれて、肌綺麗になっちゃうわ」

顔を真っ赤にする童貞。

股間を丸出しにしながら、まだ新たに恥ずかしがる余地があるのか。

体を起し、周りを見る。

運良く、誰も通りかかっていない。

考えてみれば、パチンコ主婦仲間に見られたら結構面倒なのだ。

とてもここで本番とは行かない。

「ね、近峰さんがよければだけど……」

ギュ、と巨柱を握る。

「近くの、目立たない場所にラブホテルがあるの。うふふ、お姉さん、この立派なおチンチ〇……大人にしてあげたいんだけどなあ」

今すぐもう1発出せそうな男のシンボルを、ゆっくりと擦りながら舌なめずりをする熟女。

体験版終わり

この後ラブホテルで筆おろし

さらに熟女の家夫婦のベッドで浮気セックスという展開（旦那の影がゼロなので寝取りではないと思います）

続きは製品版で